

平成 25 年 4 月入学式式辞

花咲く春を迎え、ここに多数の御来賓並びに保護者の皆様のご臨席の下、入学式を挙行できますことはこの上ない慶びであり、姫路獨協大学を代表して謹んで御礼申し上げます。

そして、新入生の皆さんご入学おめでとうございます。新たな飛躍のときを迎えられた皆さんに、心から歓迎の意とお祝いの言葉を申し上げます。

姫路獨協大学は、学校法人獨協学園に属しており、その源は、130 年前の明治 16 年に設立された、獨逸学協会学校に遡ることができます。

本学は、今から 26 年前の 1987 年に、地元姫路市から用地と多大な寄付とを提供され、獨協学園が経営にあたるという、全国で初めての公私協力方式という形で発足いたしました。当初は外国語学部と法学部の 2 学部からの出発でしたが、その 2 年後に経済情報学部を設置し、そして今から 7 年前には医療保健学部、6 年前には薬学部が加わり、兵庫県西部における文理 5 学部からなる唯一の総合大学になりました。

次に、姫路獨協大学の設立理念ですが、それは「獨協学園中興の祖天野貞祐博士の、『大学は学問を通じての人間形成の場である』という建学の理念を基に、外国語教育を重視する獨協学園の伝統を踏まえ、広く社会の求める学術の理論及び応用を研究、教授することによって、新しい文化の創造的担い手となる人間性豊かな人材の育成を目指す」というものであります。

哲学者であった天野博士の、『大学は学問を通じての人間形成の場である』というこの言葉の真意は、「人間形成はどの職場にあっても可能であるけれども、大学における人間形成は学問を媒介としたものである」というところにあります。学問の目的は真理の探究にあり、その探究心に基づく豊かな教養と専門の知識を身に着けた人材が育つというのであります。難しい問題に向かい努力してそれを解いてゆく、そして得られた答を基に実践する、この積み重ねが真摯な精神を養い、人格を高めるというのであります。姫路獨協大学はこの精神を継承しています。

現代はたとえ地方に居ようとも、国際化の波を避けることはできません。先月 21 日の新聞には、自民党の教育再生実行本部が、大学の入試を受ける基準として英語運用能力テストトーフールを活用する方針を固め、これを次の選挙公約に盛り込む方針であると報じられました。国際社会に通用する人材を育成する狙いということでもあります。

おりしも、6 月には本学にアメリカ・オハイオ州立大学の学生諸君約 30 名が、2 か月の研修のため来学いたします。これは、アメリカ国務省がサポートする国際的に重要な言語を習得するための 3 年継続のプロジェクトで、本学が我が国唯一の受け入れ機関であります。

獨協学園は、設立の経緯からして、国際的な視野を持つ人材育成を原点にもつ学園であります。本学に外国語学部があり、海外での学びの多様な国際交流プログラムが展開され、また多くの留学生が在籍しているのも、その伝統由縁であります。私は、本学には皆さんが国際感覚を身に付け、世界に雄飛するための土壌が十分に醸成されているということを申し上げたいと思います。

また、いま本学では、創立 25 周年を迎えたことを記念に、施設や設備の大幅な改修を進めております。すでに 3 月末までに、アプローチ、中央広場、および講義棟と本部棟の外装などの改修を終えました。今後は、全教室の内装及び什器の入れ替えを行う予定であり、皆さんの学びの環境は大幅に改善されることを申し上げたいと思います。

今一つ申し上げたいことがあります。それは、これから皆さんが送られることになる大学生生活についてであります。大学生には高校生までとは違った高い自由度があります。その自由をどのように使うか、あるいは自由な日々をどのように過ごすかは、皆さん自身が決めることであるということでもあります。大学には皆さんを磨き育てる知識の集積がありますが、大学はそこに居さえすれば、自動的に生長した人間になれるというところではありません。むしろ、打つ強さによって音の強さが違って来る、太鼓のようなものと言えるでしょう。ですから、皆さん自身が能動的にならないと、大学はつまらないところになってしまう可能性があります。どうか受け身にならず、自分の未来や理想の実現に向かって、積極的に求めて頂きたいと思います。本気を出して切磋琢磨する皆さんを、応援することこそ、私どもの大いなる喜びであるということ、改めて申し上げたいと思います。

ここ姫路獨協大学での学生生活が充実したものとなり、皆さんの将来の飛躍の場となることを願って、学長の式辞といたします。

平成 25 年 4 月 2 日

姫路獨協大学

学長 本多義昭